

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<書評と紹介>

出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	49
ページ	71-78
発行年	1997-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10561

〈書評と紹介〉

中野栄夫編

『護国寺誌』

小口 雅史

賀集山護国寺は、淡路島の南淡町賀集にある真言宗高野山派の寺院で、石清水八幡宮を創建した行教によって貞観年間に創建されたとされる古刹である。本書は、その本地堂の再建を記念して発刊されたもので、古代から近世に至る護国寺の歴史の概観と、周辺の諸問題を論じた上で、さらに同寺所蔵の中世文書の紹介などを中心としている。

まず本書の目次を左に掲げよう。

こあいさつ

護国寺略史

古代の護国寺（中野栄夫）

中世の護国寺―護国寺文書の紹介をかねて―（中野栄夫）

近世の護国寺（長谷川伸）

護国寺をめぐる諸相

淡路廃帝・淳仁天皇考

元久二年四月の淡路国司庁宣に見られる花押について

護国寺住職・三宮義圓

波毛康宏

中野栄夫

書評と紹介

高野山宝幢院領淡路国雅集荘の伝領について

中世淡路の舞楽料田と楽人集団

―淡路人形芝居発祥地に関連して―

護国寺文書にみられる寄進状とその地名について

護国寺文書（仁平義孝）

参考 近世にみる護国寺（鈴木敏弘）

付論 賀集山護国寺文書の調査

菊川兼男

最初の「護国寺略史」では、古代から慶応三年に至るまでの護国寺やその当時の社会状況、歴代住職の歴史などが簡潔にまとめられている。所蔵文書に即して論述されているため、とくに中世の部分については、後に全文が掲げられる護国寺文書を歴史的に理解する手助けとなる、手際よい内容紹介ともなっている。

次の「護国寺をめぐる諸相」では、護国寺文書ないし護国寺周辺の歴史などに関する諸論考が収められている。波毛論文は、淳仁天皇の淡路への配流と、その陵墓をめぐる問題について簡潔にまとめる。中野論文は、当寺所蔵文書中の白眉である、正文としては淡路で唯一の鎌倉期文書の「元久二年淡路国司庁宣」にみえる袖と奥の花押の人物比定を試みたもの（法政史学四三号よりの転載）。千葉論文は、賀集荘の領家職が、鎌倉後期に女性の婚姻を契機に高野山宝幢院から吉田家を経て三条家へと伝領されたことを明らかにする（法政史学四三号よりの転載）。菊川論文は護国寺の中世舞楽関係史料を利用した淡路人形芝居の源流についての仮説を提示する。今井論文は、寄進状の具体的な分析をもと

千葉哲司

菊川兼男

今井恒次

に、寄進の背景や現地比定、田地開発の有様を考察する。

次の「護国寺文書」では、同寺所蔵の古文書の内、中世のものが丁寧に紹介される。文書毎に上段に写真、下段に釈文・読み下し・注が付せられる。淡路島には中世文書が八〇点余あるといわれているが、そのうち六〇点余がこの護国寺文書であって、まさに淡路島の中世は護国寺文書なしには語れない。これらの文書のはほとんどは、既に『兵庫県史』史料編中世一で紹介されているが、今回の翻刻は、永年の綿密な調査を経た成果にもとづくものだけに、県史の翻刻を上回るものがある。まず県史を補うものとして新たに三点の中世文書が翻刻された。さらに本書四五号文書（県史四一号文書）については、県史では前半部分が落ちていたのを全面的に補っている。また一部、文書名を正確に改めたり、句読点の位置を改めたり、異筆注記が正確に改められたりしている。県史では一部落ちていた端裏書も補われている。さらに内容の詳細な検討の結果、閏年文書の年紀を正確に復原し、県史の排列を改めたことにも注目できよう。注の存在も、研究者のみならず、所蔵者や檀家の方々への配慮として貴重である。全文書について鮮明な写真も付せられていることから、今後は護国寺文書については本書を利用することが最も確実ということになる。

次の「参考」は、淡路について触れた近世地誌の中から、護国寺部分を抜萃して紹介するもの。

次の「付論」は、近世以来の護国寺文書調査の歴史を紹介するもの（淡友会誌よりの転載）。

さて右掲の目次に現れた人名を一瞥すれば明らかなように、

本書は、編者である中野氏の、法政大学大学院におけるゼミの共同調査・研究の成果であることはいうまでもない。記録によれば、あしかけ八年、実に二五回を超える調査の成果であるという。これまでもその成果の一部が論文として公刊されてきたわけであるが、今回、こうした形で一書にまとめられたことは、まさに学界の慶事である。

こうした地方における文書調査については、まます所蔵者や学界から、調査者の興味を引くものについてだけ「つまみ食い」的になされているとの批判を耳にすることがあるが、本書は中世護国寺文書全体についての、調査結果の非常に丁寧なまとめとなっている。刊行時に、そのことが地元新聞紙上をにぎわしたのも当然のことであろう。

さらに量的にも膨大で、今回紹介には至らなかった近世・近代文書についてまで、データベース化が進行中とのことである。その公表が期待される。

さて以上のように、本書は一つの寺院についての文書調査とその公刊の模範例として最適のものといえよう。本書を広く世に推薦したいと思う所以である。

（一九九六年四月刊 B5判 一九六頁 三八〇〇円〈非売品・実費頒布〉 兵庫県三原郡南淡町賀集八幡・護国寺）

村上 直編

『幕藩制社会の地域的展開』

吉原健一郎

本書は編者の村上直氏の古希と法政大学の定年退職を記念して、大学院で指導を受けた教え子一九名が献呈した論文集である。

全体は五つの編に分かれて構成されているが、内容を左に紹介する。

第一編 支配体制

江戸幕府代官陣屋に関する一考察

西沢 淳男

水戸家鷹場の構造とその特質

根崎 光男

町奉行大岡忠相の地方御用とその特質

中根 賢

—享保十七年〜延享五年の酒匂川治水を中心に—

吉岡 孝

—勘定奉行兼帯関東郡代役所の活動を通じて—

馬場 憲一

第二編 農村と都市

元禄期の小百姓の所持と家

白川部達夫

富士山北麓の菜園と山論

酒井 耕造

名主家の権威と村・地域

堀 亮一

村と町—湊町浦賀の構造と住民—

平川 新

書評と紹介

近世富士北麓地域における新田組の形成と村落構成

米崎 清実

第三編 民衆運動

旗本木原氏と新井宿村

佐々 悦久

—義民伝承の形成をめぐる—

寛延一揆の展開と守山藩の対応

柳田 和久

第四編 交通と流通

街道村の発展—相州大住郡曾屋村の事例—

佐藤 豊己

「飯盛女」考

宇佐美ミサ子

—例幣使街道木崎宿を事例として—

近世東廻り航路の買積船と港湾都市

佐々木 淳

—幕末期常陸国水戸領那珂湊廻船の事例—

第五編 宗教と文化

徳川家綱の茶湯について

武田庸二郎

—身分制社会における饗応と贈答—

地域社会と信仰の山

外山 徹

—武蔵国多摩郡上栲田村と高尾山を事例として—

近世中後期俳壇の諸相

横浜 文孝

—葛飾派の実態と身分秩序の変容について—

地域の歴史と権力の歴史

岩橋 清美

—江戸幕府の地誌編纂における寛政期の意義—

それぞれの論文の内容は多岐にわたり、紙数の制約もある中で、十分な論評は不可能であるが、各論文に関して概要を述べ、必要に応じて寸評風に論評を加えていきたい。

第一編の西沢論文は、まず代官陣屋の分布・変遷を七筋に分けて整理している。ついで、陣屋数の増減を幕府の財政政策との関連で分析している。行政改革によって本陣屋数を削減しても諸入用は増大する結果になったという指摘は興味深い。

根崎論文は水戸家鷹場の儀礼秩序・支配構造・役負担組織を検討し、その実態を明らかにしたものである。宝暦期を頂点とする組合内の負担平等化運動によって、その均等化が進められたとする。

中根論文は大岡忠相の配下であった糞笠之助の酒匂川治水について論じたものである。その結果、この治水事業は大岡の地方御用のなかでも異質な性格を持ったものであると結論づけている。

吉岡論文は、寛政の伊奈氏失脚後の勘定奉行が兼帯した関東郡代の時期を、地域秩序の変容との関連で具体的に追究したものである。このばあい「生活」をめぐる権力と民衆とのせめぎあいという視点を一層深めるべきであるという指摘は重要であろう。

馬場論文は、八王子千人同心が地域社会において幕臣としての側面と農民身分としての位置づけとの両面を、具体的に紹介したものである。

第二編の白川部論文は信濃国佐久郡下海瀬村を対象に十七世紀末の農民の小百姓化の動向を分析したものである。とくに、非血縁の抱と抱親の関係について土地移動との関連を論じている。

酒井論文は幕府が下賜した菜園をめぐる諸問題を取り上げている。とくに上吉田村の訴訟における百姓の「周到な戦略」の指摘は興味深い。

堀論文は上総国望陀郡下宮田村の山口家を取り上げ、旗本の役人でもあり名主でもあった同家が、道をめぐる紛争のなかで果たした広域的な権威について論述している。

平川論文は東浦賀「村」と、その下部組織としての「町」の関係を、役職やその職務、入用、住民構成などを通じて検討したものである。なかでも、日雇層が町政費用を負担したとする点は注目されるが、ゴミ捨賃は江戸でも各戸負担であり、その点の評価が今後の課題であろう。

米崎論文は行政村のなかでの新田組の格差について論じている。格差は正の運動が進むが、現在に残る気質の相違をどう考えるか。今後の検討を期待したい。

第三編の佐々論文は荏原郡新井宿村の「義民六人衆」の伝承を詳細に検討したもの。伝承は近代社会でも生みだされるという好例であろう。

柳田論文は、桑折天領にはじまる寛延一揆の具体的展開と守山藩の対応を検討したうえで、この一揆は広域闘争ではなく領域ごとの全藩一揆であると結論づけている。

第四編の佐藤論文は相州の街道村曹屋村の発展について、「村明細帳」の分析を中心として論述したものである。在方市から在郷町に発展するという事例である。

宇佐美論文は日光例幣街道木崎宿の飯売女の実態を明らかにしたものである。周辺村落の風儀にも大きな影響を与えた幕府の宿場政策について論述したものである。

佐々木論文は仙台領田代浜出身の平塚八太夫が、那珂湊で活躍

し、さらに仙台藩の御用達となることから、那珂湊と石巻湊との対比を検討し、商人の活動舞台の相違を検証したものである。

第五編の武田論文は従来軽視されていた四代将軍家綱の時代の茶湯を三期に分けて検討した。献上と下賜による茶道具を表象し、「身分内序列の確定」に果たした茶湯の役割を検討している。

外山論文は高尾山と山麓の上栢田村との関係が、高尾山の性格の変化をふくめて徐々に変容していく様子を分析したものである。その契機として地中百姓の成立、地境争論があり、両者の関係が稀薄になるという。

横浜論文は山口素堂以来の俳詣集団である葛飾派に関する論考である。俳人の地域分布を取り上げ、さらに階層・職業などの動向から宝暦期以降の身分秩序の変容を指摘したものである。

岩橋論文は寛政期〜文化期の地方文人の地誌編纂の動向を幕府の役人との交流、文人相互間の交流のなかで検討したものである。しかし、幕府と地方文人（地域）とは歴史意識の差異がみられると指摘している。

以上、各論文の簡単な紹介に終始した感があるが、執筆者それぞれの関心にもとづく研究の一層の深化を期待したい。

（一九九六年刊 A5判 六一二頁 一八〇二五円 雄山閣）

丹治健蔵著

『近世交通運輸史の研究』

渡辺 和敏

かつて法政大学史学科の近世史部門の特徴は、交通史・交渉史・農村史にあると言われた時期があった。そう言われるに相応しい教員がそろっていたし、卒業生のなかには今もこの分野の第一線で活躍している者が多い。

そのなかで今回、大著『近世交通運輸史の研究』を刊行した丹治健蔵氏は、交通史の分野での法政大学の先達者であり、大先輩である。同氏は昭和二十七年に法政大学史学科を卒業した後、高等学校の教師を勤めながら大学院修士課程に学び、昭和三九年からは博士課程に席をおくと同時に史学科研究室の助手を勤めていた。助手を退任してからは、文学部や大学院で兼任講師として教鞭をとったこともある。

この間、交通史関係における学問研究の優秀さもさることながら、その卓越した人柄により、丹治氏から感化を受けた後輩は多い。かく言う本書の紹介者もその一人である。

丹治氏は先に『関東河川水運史の研究』（昭和五九年、法政大学出版局）という大著を刊行している。これは、ほとんどが同氏の助手時代以降の研究成果をまとめたもので、文字通り関東地方、特に利根川舟運に関する先駆的かつ実証的な研究内容であっ

た。これにより同氏は、昭和六〇年に法政大学より文学博士号が授与された。

丹治氏の場合、先の大著が余りにも評判になったために、その専門分野は河川水運史だけであると思っている人が以外に多い。もちろん河川水運史に関しての第一人者ではあることは言うまでもないのであるが、実はその研究の出発点は陸上交通史であったということであり、その後も水運史を研究する傍らで陸上交通史に関する優れた論文も発表している。それだけでなく、近世後期・幕末期の幕府の海防政策に関する極めて実証的な研究も多く発表している。

丹波氏が今回刊行した『近世交通運輸史の研究』の内容は、先の大著後に著した水運史関係と、その傍らで進めていた陸上交通史関係の論文、さらにそれに加えて研究生活初期の論文と新たな未発表論文を収録したものであり、全体的に近世における水陸の交通運輸史を体系的に把握しようとした意欲がみなぎっている。本書の題名のキーワードを、交通運輸史とした所以であらう。

本書は次に紹介するように全体を二編に分け、合計で一三章と新稿の補論二論文からなっている。

第一編 水上交通

第一章 近世荒川水運の展開

第二章 上利根川水運と江戸地廻り経済の展開

第三章 中利根川水運と江戸地廻り経済の展開

第四章 天明期における中利根川水運と商品流通

第五章 近世後期における中利根川水運と商品流通

第六章 近世見沼通船と地廻り経済の展開

第七章 近世大名引越し荷物の水上輸送

補論 近世河川水運と商品流通をめぐる諸問題

第二編 陸上交通

第一章 近世宿駅問屋の確立過程

第二章 中山道における木材輸送と木問屋

第三章 享保十三年の日光社参と国役助郷負担

第四章 安永五年の日光社参と国役助郷負担

第五章 江戸周辺脇往還継立場と助郷免除願

第六章 近世後期における宿駅の実態

補論 奥州たばこの生産・輸送と水上交通

あとがき

これをみれば、本書の大体の内容を知ることができるであろう。

しかし実はほとんどの章には副題が付され、それをみればさらに内容がはっきり分かるようになっていいる。巻末には詳細な索引も付されている。いかにも丹治氏らしい心遣いである。

第一編を総体的にみると、商品流通史的な視点を柱にして利根川水系や荒川の舟運などを分析し、関東農村における産業経済の発展やその変化を明らかにしたものである。補論では、下総古河・船渡河岸史料によって古河藩主転封の際にその引越し荷物と河川・海上輸送の関係を明らかにし、水運史研究の新視点を見出している。

それに対し第二編では、近世初頭における宿駅制の成立過程や

書評と紹介

中山道における木曽材木運送の実態を明らかにし、中期の将軍日光社参時における人馬継立と武蔵多摩郡農村の国役助郷の問題や、中後期の足立郡の脇往還の継立村、あるいは日光例幣使街道において特権通行が宿駅に与えた影響を分析している。そして補論では、奥州産たばこの流通を通じて水陸交通の関連とその研究の深化の重要性を提示している。

正直に言って、今まで個別的に発表された丹治氏の論文には派手さはなかったように思う。それは同氏の性格にも起因するのであらうが、決して奇をてらうのではなく、常に史料に基づいた極めて実証的な研究であったからである。

しかしこうしてそれぞれの論文が集大成されてみると、その成果には極めて説得力がある。本書の第二編に収録された近世初期の宿駅に関する論文は三〇年も以前に発表されたものであるが、専門家のなかでは依然として高い評価を得ている。本書は新稿部分を含め、先の大著と同様に、長く高い評価を受け続けることであらう。

丹治氏は見かけによらず、今年（平成九）中に古希を迎えるという。しかし昨年の地方史研究協議会の大会で若い研究者に交じって発表をしたりしてその年齢を一向に感じさせず、いまだに研究姿勢は極めて新鮮である。今後も交通運輸史に関する指導者として、学界では大きな存在でいつづけるはずである。なお、前述したように同氏は交通運輸史に関するもの以外に、近世後期・幕末期の海防関係の優れた論文を多く発表している。この方面の研究でも、是非とも集大成をしてもらいたい。

丹治氏の後輩の一人として、同氏の益々のご健勝とご活躍を祈念すると同時に、「法政史学」の若い会員には、丹治健蔵氏という素晴らしい大先輩がいて、今なお活躍しているということを誇りに思ってもらいたい。

（一九九六年刊 A5判 五四八頁 一二三六〇円 吉川弘文館）

【会員編著書抄】

中野栄夫編

【護国寺誌】

湯本豪一著

【図説明治事物起源事典】

石井正敏編

【増補日中・日朝関係研究文献目録】国書刊行会

安岡昭男著

【日本近代史】

同成社 平成八

柏書房 平成八

平成八

中国社会科学出版社 平成八